
忘れ物

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘れ物

【Nコード】

N9073S

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

作家谷山準一郎は美食家である。編集者達はその彼を料亭に呼んで新作の依頼をしようとした。しかしその谷山はうっかりと。文学コメディイです。実話を元にしています。

第一章

忘れ物

谷山準一郎は有名な作家である。文豪と言ってもいい。

その彼の嗜好はだ。出版会どころか誰もがよく知っていることだった。

「好きだねえ」

「全くね」

「また食べ物について書いて書いてるな」

「そうだよな」

その新作を見ながらだ。話すのだった。

「鰻にすっぽんかあ」

「それに豆腐か」

「京都の料理だね」

「そつえば今は京都にいるらしいな」

「そうだよな」

その作品でもなのだ。食べ物について書かれていたのだ。そもかなりの枚数を使っただ。

このことがだ。この作者についての最大の個性になっていた。その耽美な作風でもあるがそれもだ。とにかく誰でも知っていることだった。

それで編集者の方もだ。新作を御願ひする時にはだ。

「今度はどの料亭に招待しようか」

「何しろ舌が肥えてるからなあ」

「下手な店だとあれだしな」

「そこが難しいよな」

そんな話をしながら彼の作品を読みながらだ。考えるのだった。

「今度はステーキだな」

「それに中華料理か」

「あの人和食だけじゃないしな」

「本当に何にする？」

「今度新作書いてもらう話出てたよな」

「ああ、そうだ」

そしてだ。ある出版社ではこんな話も出ていた。

「編集長が言うんだよ。あの人だってな」

「じゃあどうするんだ？」

「どの店にするんだ？」

「そうだな、ここはね」

ここで話をしてだ。その結果だった。

「和食にするか」

「和食か」

「それか」

「やっぱりそれだろ」

こう言つてのことだった。

「あの人が一番好きなのはな」

「そういえば最近の作品は和食ばかり出てるな」

「ああ、そうだな」

「確かにな」

このことも話されるのだった。それでだった。

「じゃあここはな」

「料亭だな」

「そこにするか」

「店は」

こうして事前の打ち合わせをしてだ。そのうえでだった。

谷山をその店に招待する。太めの身体の小柄な老人である。髪の毛はもうなくなっている。何処か豊かな顔をしている。きているのは見事な渋い緑の色の和服だ。その彼が来たのだった。

彼はすぐに個室に呼ばれた。畳に掛け軸に見事な壺まである一室にだ。そこで編集長と新たに担当になる二人のスーツの男に出迎え

られた。そしてであった。

「いや先生ようこそ」

「よくいらっしやいました」

二人は彼を恭しく出迎えてこう言うのだった。そしてだった。

「まずはです」

「ここでお昼でも」

「いやあ、いいですねあ」

谷山はだ。二人の言葉を受けてこれ以上はない笑顔になった。そうしてだった。

第二章

部屋の中に入り台を挟んで座る。早速だった。

ハマグリの中豆すり流し

河豚の白子に酢をかけたもの

蒸し蟹の味噌あえに本もろこ

焼き河豚の白子添え

猪のたたきにフオアグラと黒トリュフを添えたもの
筍煮

湯葉と山菜のあんかけ

赤貝の肝添え

鴨を焼いてそこに山椒をかけたもの

大根炊たん

アワビとナマコの卵巣を柚子で味付けした素揚げ

十割蕎麦、雲丹

つぶ貝のあんかけ

本カマスの素揚げ

ゴリの佃煮

穴子の稚魚

ハマグリしんじょのお椀

桜鯛のお造り

桜マスのつけ焼き

木の芽添え

甘鯛のおこわ茶漬け

穴子と山菜の天ぷら

海老の白菜あんかけ

小柱のカラスミあえ

山菜の酢味噌あえ

にしんの大根寿し

筍の塩釜焼き
よもぎ餅の白味噌椀
鹿のたたき
鯉のお造り
熊の手の刺身
ふきのとうの白あえ
春子と山菜の天ぷら
山菜と岩魚の卵のあえもの
岩魚の卵の醤油漬
自然薯ポン酢
アマゴのつけ焼き
筍とグジの炊き合わせ
山菜の山葵あえ
鯖の馴れ寿司
鯉と岩魚と鹿のお造り
もろことばちことふきみそ添え
氷魚
岩魚の骨せんべい
山菜の天ぷら
徳山鮓
フナのお造り
氷魚の釜揚げ
カラスミ
カラスミ茶漬
ワカサギの天ぷら
猪の炭焼き
鴨のあぶり焼き
ウナギ茶漬
河豚の卵巣のぬか漬
ウナギの肝

こうしたものがだ。次から次にと。朝から晩までひっきりなしに出されるのだった。まさに山海の珍味を集めた恐ろしい宴であった。無論酒も素晴らしいものだった。大食漢としても知られる谷山は実に堪能した。

それを見てだ編集長と担当はこっそりと話すのだった。

「上手くいきそうだな」

「そうですね」

御満悦の谷山を見ながらこそそと話す。

第三章

「先生御気に召されてるぞ」

「ええ、確かに」

「これならだ」

編集長がにんまりとして言った。

「新連載はな」

「いけますね」

「奮発した介があつた」

編集長はこうも言った。実際にここまで山海の珍味を出すにはかなりの出費が必要だった。しかしその介があつたというのである。

「本当にな」

「全くですね。それじゃあ」

「連載になったら頼むぞ」

「はい」

担当は確かな顔で頷く。そうしてだった。

最後の和菓子とお茶を楽しむ谷山にだ。こう言つのであつた。

「あの、先生」

「うん、今日は最高だったね」

「御気に召されましたか」

「実にね」

「それは何よりです。それでは」

「今日はこれで」

連載の話をしようとするのだ。谷山はこう言ってきたのだった。

そしてだ。すつと席を立てた。障子のところに向かう。そのうえでこう言つのであつた。

「御馳走様」

「えっ!？」

「あれっ!？」

編集長も担当もだ。これには呆氣に取られた。

「帰られたぞ」

「ですよ」

「何でなんだ!？」

編集長は呆然としたまま言う。

「何か不都合があつたか!？」

「いえ、心当たりは何も」

「気付いていないとかか、こっちが」

「料理がまずかつたですかね」

担当はこんなことも言った。

「それだと」

「いや、それはない」

編集長がそれをすぐに否定した。彼等も食べているからだ。それはないとすぐにわかつた。

「こんな美味いのはな」

「谷山先生も満足されてましたね」

「ああ、それは間違いない」

二人でそれを確認し合つた。

「じゃあどうしてなんだ」

「何で先生は帰られたんでしょうか」

「訳がわからないぞ」

「あの、どうしてなんでしょうか」

二人はこの時は何故谷山が帰つたのかわからなかつた。それで料亭であたふたとするだけであつた。しかし数日後にだつた。

不意にだ。編集部にだ。谷山から電話はかかってきた。

「この前はどうも」

「あれっ、谷山先生ですか!？」

電話を受けた担当は彼の声に驚いた。

「先生が何の御用件でしょうか」

「それだけれどね」

こう言ってきたのを聞いてだ。その怒った理由を言われるかと思
った。しかしであった。谷山はここでこんなことを言うのだった。

「この前の料亭のことだけれど」

「は、はい」

「美味しかったよ」

実にも機嫌での言葉だった。

「本当にね。有り難うね」

「はあ」

担当はその御礼にまずは頷いて応えた。

「御気に召されましたか」

「いやあ、あそこまで食べられたのはね」

「食べられたのは」

「久しぶりだったよ。実によかったよ」

声はだ。極めて満足しているものだった。

第四章

「有り難うね」

「あの、先生」

担当はだ。恐る恐る谷山に尋ねた。

「それでなのですが」

「それで？」

「いいのですか？」

こつ彼に問うのである。

「それで。御気分を害されたとかは」

「気分を害したって？」

「はい、そういうことは」

「何でそうなるんだい」

電話の向こうでだ。谷山がきよとなっっていることがわかった。

「どうしてそうなるんだい」

「違いますか？」

「全く。そんなことはないよ」

そうだというのである。

「何一つとしてね」

「そうなんですか」

「あの、それでだけねど」

今度は谷山の方から問うてきた。

「あの時は何で呼んでくれたのかな」

「えっ!？」

「何でなのかな、呼んでくれたのは」

こつ担当に尋ねてきたのだった。

「私を呼んでくれたのは」

「料亭にですか」

「何か用があつたのかい？」

「はあ」

「何でだったのかな」

「あのですね」

ここです。担当は何故彼をあの料亭に呼んだのか話した。それからだった。

また編集長と担当が彼をあの料亭に呼んで。そうして話をするのだった。

谷山はその話を聞いてだ。啞然として話すのだった。

「そうだったのか」

「はい、そうです」

「新連載を御願いしたいと思ひまして」

「ああ、それでだったんだ」

谷山はそれを聞いて納得した。自分の席に座りながらそのうえで言うのだった。

「新連載だったんだ」

「はい、それでだったのです」

「実は」

「成程ね」

ここでした。彼は事情がわかった。そうして言うのだった。

「じゃあ新連載は」

「はい」

「どうされますか」

話がようやく核心に至つてだ。編集長も担当も身を乗り出した。そうしてそのうえで彼の話をしかと聞こうとするのだった。

するとだ。彼は言うのだった。

「書かせてもらつよ」

「そうですか」

「書いてくれるんですね」

「あそこまで御馳走になったからね」

笑顔で話す彼だった。

「是非共ね」

「はい、それでは」

「御願います」

「いやあ、それでだったんだ」

谷山は笑いながら話していく。

「成程ね。それならそうと早く言ってくれたらよかったのに」

「ま、まあそれは」

「何といたしますか」

編集長と担当は唸りながら述べた。

「後で申し上げようと思ったのですが」

「それが」

「そこで僕が先に立ってしまった」

そうだったとだ。話すのだった。

「僕のすっかり話ということかい」

「いやあ、あの時は驚きましたけれどね」

「それでもね」

こんな話をしてだった。この日もだった。

御馳走が次々と運ばれてくる。この日の御馳走は何かというのだ。
った。

「口直しということだ」

「いいですか？」

「という二度目の御馳走だね」

「ええ、御願います」

「それじゃあ」

こうしてだった。谷山はこの日も御馳走を楽しむことになった。
彼のすっかりからはじまった話であったがそれでもだ。二度美味しい
思いをしたのだった。

2
0
1
0
.
1
0
.
2
4

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9073s/>

忘れ物

2011年5月1日22時11分発行